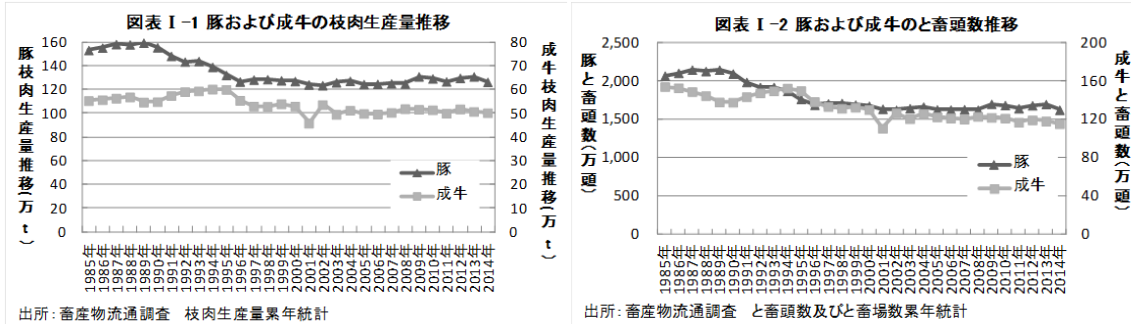


# I. 食肉の生産・流通・消費の現状

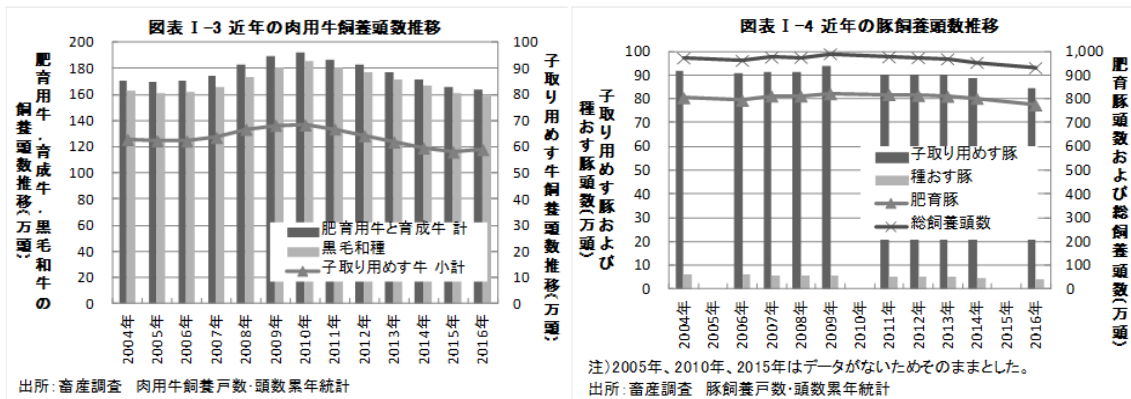
## 1. 全国における食肉生産と流通の現状

### (1) 全国における食肉生産の現状

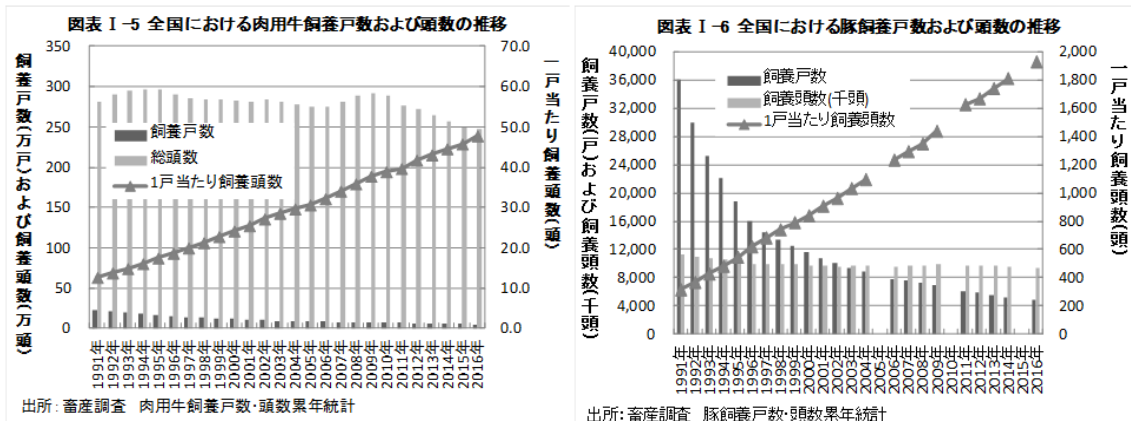
全国の豚および成牛枝肉生産量の推移は、図表 I-1 のとおりである。豚と成牛、いずれも枝肉生産量は減少傾向にある。豚と成牛の畜頭数も図表 I-2 のように、減少傾向にある。



近年の肉用牛の飼養頭数は図表 I-3、豚の飼養頭数は図表 I-4 のとおりである。両頭数とも、2010年頃をピークにして減少傾向にある。



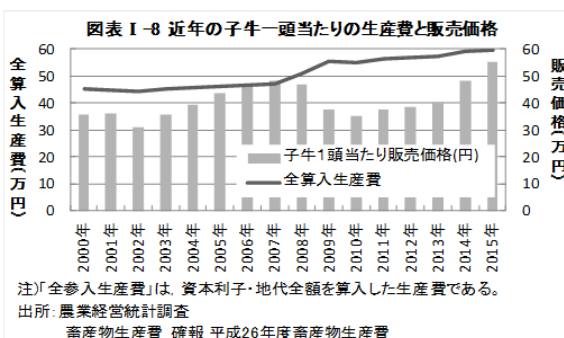
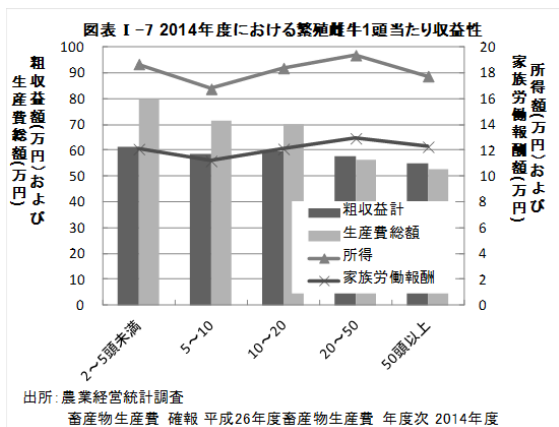
このように日本国内の肉用牛および豚生産は近年縮小傾向にある。次に生産者の現状を見てみる。図表 I-5 は、肉用牛の飼養戸数と飼養頭数の推移である。飼養戸数は一貫して減少傾向にあるが、総頭数は1994年まで増加し、その後なだらかに減少、2009年に再び



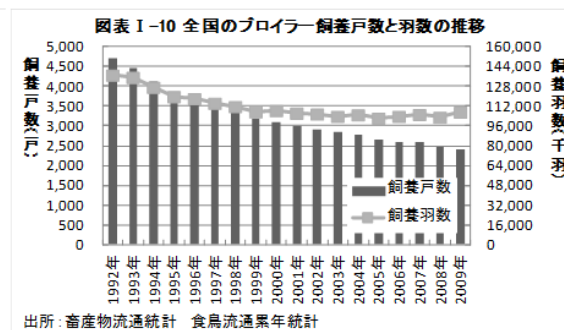
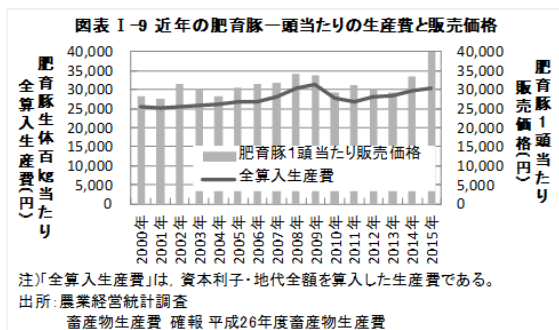
ピークを迎え減少する傾向にある。これに対し、一戸当たりの飼養頭数は一貫して増加傾向にあり、2016年時点で一戸当たり平均47.8頭となっている。

豚の飼養戸数と飼養頭数は図表 I-6 のとおりである。飼養戸数は肉用牛と同様一貫して減少傾向にある。飼養頭数は1989年が最も多く11,868頭であり、年により100頭単位での増減はあるが、概ね減少傾向にある。一戸当たりの飼養頭数は肉用牛同様増加し続けており、2016年時点で一戸当たり平均1,928.2頭となっている。

肉用牛飼養経営体の経営状況は図表 I-7 および図表 I-8 のとおりである。図表 I-7 の2014年度の繁殖雌牛1頭当たり飼養規模別収益性をみると、粗収益額が生産費総額を上回るのは、20頭以上飼養の経営体であることがわかる。図表 I-8 は近年の子牛一頭当たりの生産費と販売価格の関係である。2010年に生産費と販売価格が底を打ってからは、2015年まで両指標とも増加傾向にある。2015年以降の販売価格増加率は生産費増加率よりも高い傾向にある。2007～2010年に販売価格は下落したが、その間も含め一貫して生産費は上昇している。



肥育豚飼養経営体の経営状況は図表 I-9 のようになっている。生産費と販売価格とそれぞれで単位が異なるため単純比較はできないが、傾向性を見れば2013年以降、生産費と販売価格の両指標がともに増加傾向にある。また、2013～2015年の期間の販売価格増加率は生産費増加率よりも高い傾向にある。

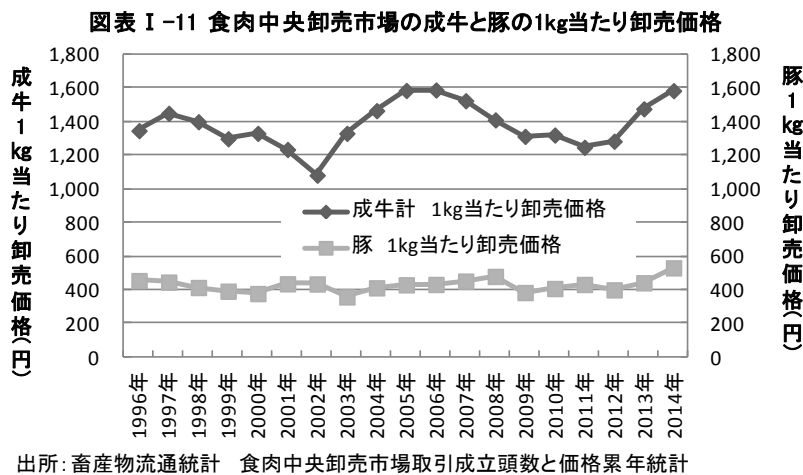


一方、全国のブロイラー飼養戸数と羽数の推移は図表 I-10 のとおりである。飼養戸数の減少は牛や豚と変わらず、飼養羽数は 2000 年以降安定して推移している。

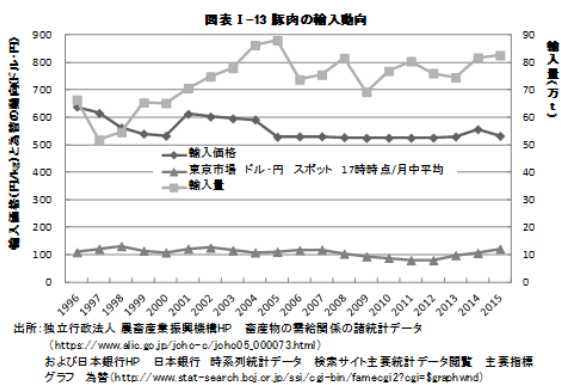
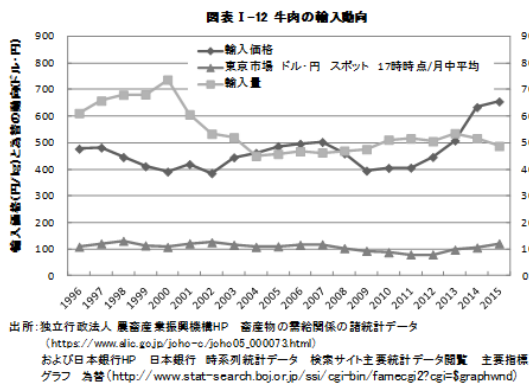
(2) 全国における食肉流通の現状

2010～2014 年の食肉中央卸売市場における規格別成牛枝肉の 1kg 当たり卸売価格は、同期間にほとんどの規格で値上がり傾向にある。一方、1996～2014 年の期間の食肉中央卸売市場における規格別豚枝肉の 1kg 当たり卸売価格は、2012 年以降「極上」以外の規格で値上がりが確認できる。

成牛と豚 1kg 当たり卸売価格を長期で見たものが図表 I-11 になる。2014 年の成牛の卸売価格は 2005～2006 年時点に匹敵する 1,580 円台の水準となっており、豚の卸売価格は 1996 年以降最高値である 530 円となっている。



近年の輸入動向は牛肉が図表 I-12、豚肉が図表 I-13 のようになっている。牛肉は、輸入量と輸入価格が負の相関性を持ち、輸入価格と為替相場が正の相関性が見受けられる。また、2013～2014 年は輸入量が減少傾向にある。豚肉は、輸入量と輸入価格間に相関は見受けられず、輸入量と為替相場との間に正の相関が見受けられる。豚は輸入量の増加が目立つ。



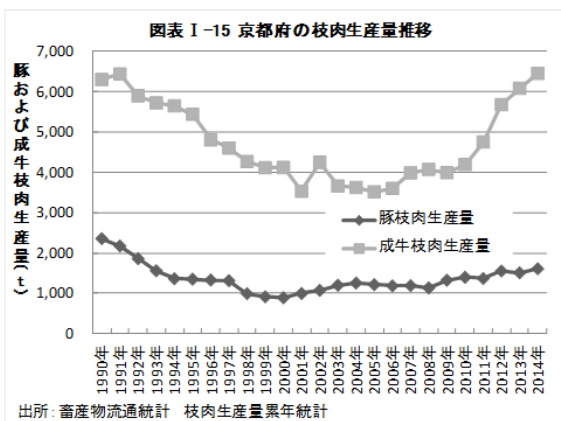
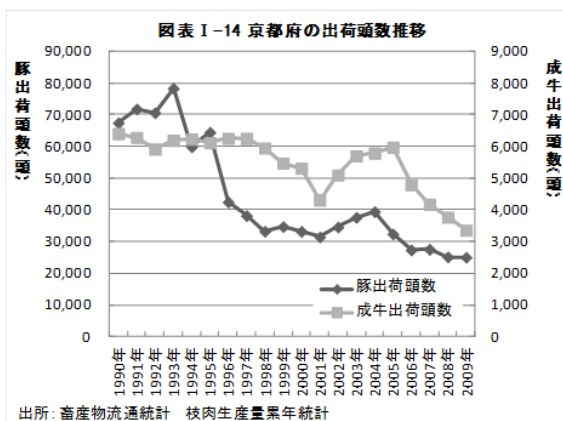
牛肉輸入量は2000～2004年に減少したものの、2010年以降は50万トン前後を推移している。豚肉輸入量は2000～2005年にかけて増加し、その後80万トン前後を推移している。1997～2000年までは豚肉よりも牛肉の輸入量が多かったが、2015年時点では豚肉輸入量が30万トンほど多い状況にある。

以上でみたような、近年の特に牛肉の価格変動は、2010年の口蹄疫発生がきっかけのひとつとなった仔牛生産の減少による和牛不足の深刻化や、円安による輸入肉の高騰が要因となっている。

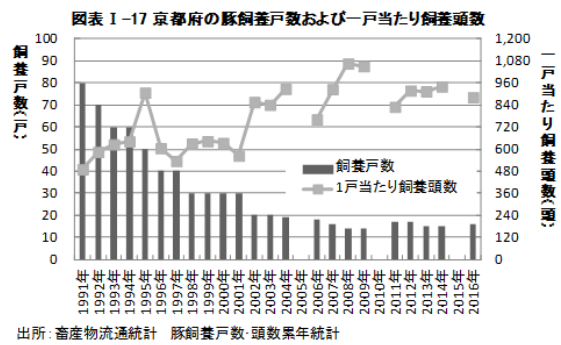
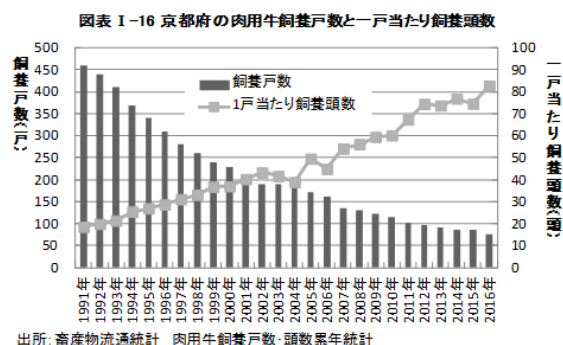
## 2. 京都府内の食肉生産と流通の現状

### (1) 京都府内の食肉生産

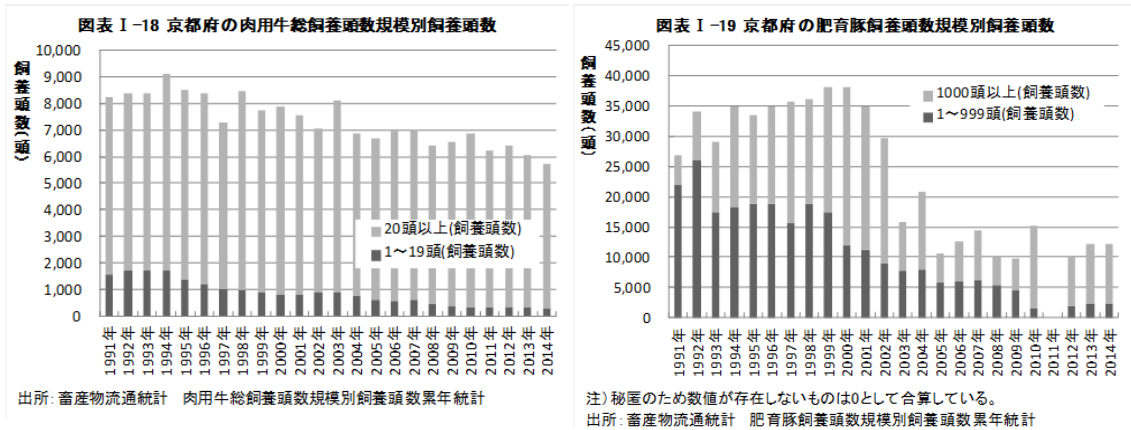
京都府における食肉生産は図表 I-14 と図表 I-15 のようになっている。豚と成牛の出荷頭数は2002～2004年は増加傾向にあったが、その後2009年までは減少傾向にある。他方、豚と成牛の枝肉生産量は、2000年以降増加傾向にある。特に成牛は2009年以降増加率が高い。



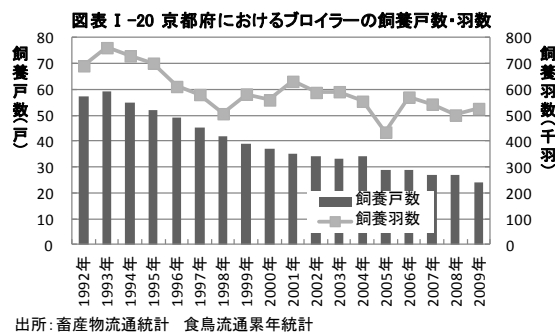
肉用牛と豚の飼養頭数推移は図表 I-16 と図表 I-17 のようになる。2016年時点で飼養戸数はそれぞれ肉用牛76戸、豚16戸となっており、戸数の減少に合わせ一戸当たり飼養頭数は肉用牛82.2頭、豚881.3頭と増加している。



京都府での肉用牛と肥育豚の飼養規模別にみた頭数の推移を示したものが図表 I-18 と図表 I-19 である。肉用牛では飼養頭数 20 頭以上の飼養戸数が総飼養頭数の 90%以上を占めている。肥育豚については、秘匿化され数値が表れていないが、傾向性だけを確認すれば飼養頭数 1,000 頭以上の飼養戸数が大勢を占めている。

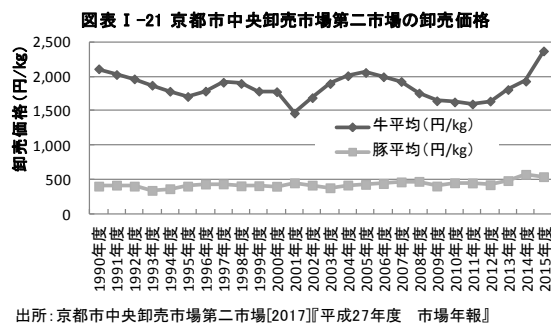


また、京都府のブロイラー飼養戸数と羽数は図表 I-20 のとおりであり、いずれも減少傾向にある。

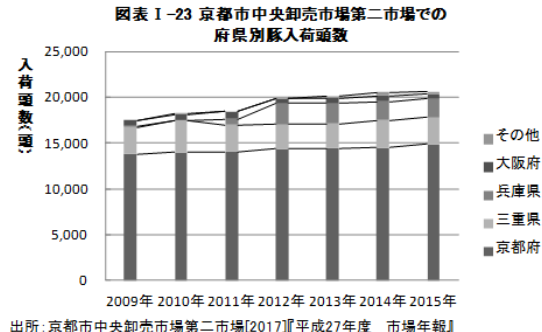
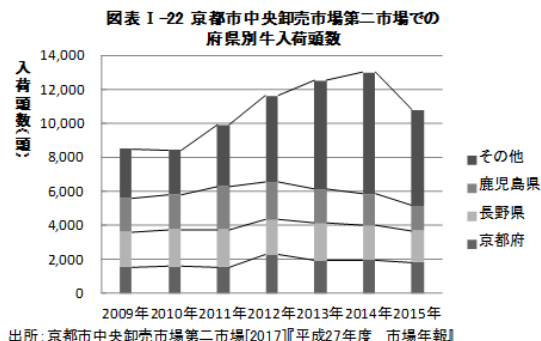


## (2) 京都府内の食肉流通

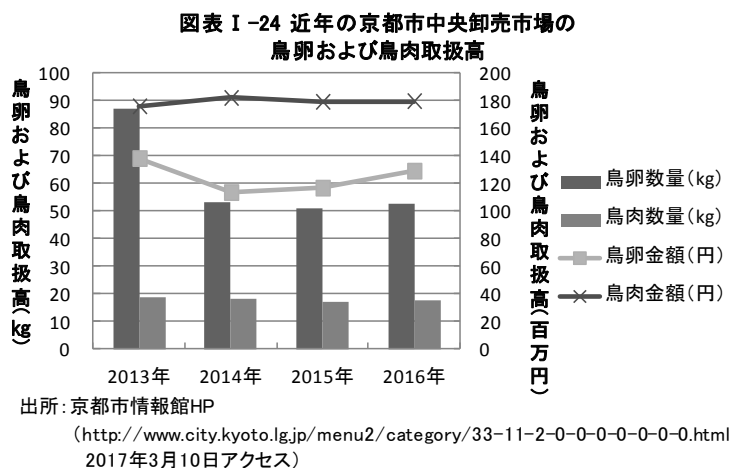
京都市中央卸売市場第二市場での牛と豚の年平均の卸売価格は図表 I-21 のようになっている。1990 年以降牛の平均卸売価格がキロ 2,000 円を超えているのは、1990 年、1991 年、2004 年、2005 年、2015 年のみであり、2015 年はキロ 2,369 円と 1990 年以降での最高値を記録している。一方、豚の平均卸売価格は、1990 年以降緩やかに上昇しており、2014 年以降はキロ 500 円を超えている。



京都市中央卸売市場第二市場に入荷している牛と豚の出荷地別頭数は図表 I -22 と図表 I -23 になる。牛の入荷頭数は、京都府からの入荷が概ね 15%～20%となっている。一方、豚は京都府からの入荷が 70%～80%となっている。



京都市中央卸売市場第一市場の鳥卵と鳥肉の近年の取扱高の推移は図表 I -24 のとおりである。鳥卵の取扱数量は安定的だが、鳥肉の取扱高数量は 2014 年に大きく減り、そのまま安定した傾向にある。これに対し、取扱金額は鳥卵が 2014 年以降上昇傾向にあり、鳥肉は安定する傾向にある。



なお、京都市中央卸売市場第二市場の『平成 27 年度 年報』に記載されている統計に、「馬」と「めん羊・山羊」の項目はあるものの、当年度の取り扱い記録はない。

また、捕獲鳥獣の食肉利活用は、統計が存在していないため流通量の把握は困難である。しかしながら、農林水産省が発表している「Ⅲ 捕獲した鳥獣の食肉利活用について」では、調査した 30 市町村の食肉利用は約 1 割にとどまっていることが示されている。野生鳥獣を地域資源として活用している事例では、2015 年 6 月 1 日時点で京都府内南丹市、京丹後市、福知山市、伊根町が紹介されている。